

十九世紀の広東語(8)上昇変音

竹越美奈子

一

粵語には声調交替に特定の意味を表すという現象がある。これを「変音」とか「変調」(あるいは連読変調と区別して「習慣変調」と呼ぶ。変音には高平変音と上昇変音の二種類があり、今回は圧倒的に用例の多い上昇変音についてとりあげる。上昇変音とは簡単に言うと、陰上(一般的な調値は35)以外の声調が陰上に変化してもとの声調とは異なる意味を表すということで、現在の多くの辞書では声調符号に\*をつけて、上昇変音であることを明示する。例えば2014年7月現在最も新しい広東語の辞書である(と思われる) *Putonghua Cantonese English Converter*(Shin Kataoka and Ying-Ping Cream Lee, Greenwood Press, May 2014, Hong Kong)で、「女」はもとの声調である陽上(一般的な調値は23)では female の意味であるが、陰上(35)で読まれると daughter の意味になる。これには上昇変音であることを示す\*がついている。

変音の起源について、遠藤光暁氏は接尾辞「児」であると考えている。(「粵語変音の起源」、『青山学院大学一般教育論集』28、1987年)しかしながら、そもそも変音がいつどのように成立したのかについてはよくわかっていない。そこで小文では、現在の広州話で変音となっている語が早期粵語資料でどのように表記されているのかを調べて、上昇変音がいつどのように成立したのかについて考察したい。

二

今回は、早期粵語資料として *Easy Lessons in Chinese*(Williams1842)の第五章会話篇を使用する。それは、この資料が第五章を会話文と明示して、文語などを記述したそれ以外の章と明確に区別しているという理由による。そもそも変音は口語的な語に多く発生すると考えられるからだ。

表1は、現代語の辞書で上昇変音とされている語の早期粵語資料における声調を調べたものである。現代語の辞書の用例はできるだけ、早期粵語資料の用例と同じ語彙を探したが、同じ語彙が収録されていない場合は当該辞書に収録されている同類の語を示した。声調は数字で表した。\*は上昇変音(陰上)と表記されていることを示す。/は、二通りの記載があることを示す。数字が表す声調は以下の通り。

1=陰平(55)と陰入(5), 2=陰上(35), 3=陰去(33)と中入(3),

4=陽平(21), 5=陽上(23), 6=陽去(22)と陽入(2)

現代語は以下の辞書を使用した。

饒等=饒秉才等 1981『廣州話方言詞典』(香港:商務印書館)。主に大陸で普通話の話者向けに編纂された辞書。普通話と違う語彙を中心に収録。

中嶋=中嶋幹起 1994『現代廣東語辭典』(東京:大学書林)。アルファベット順配列。

千島=千島英一 2005『東方広東語辞典』(東京:東方書店)。親字方式で配列。

Kataoka=Shin Kataoka and Ying-Ping Cream Lee 2014. *Putonghua Cantonese English Converter*, Hong Kong: Greenwood Press. 普通話のアルファベット順配列で、対応する広東語と英語を示した語彙集。

表 1 : 現代語と早期粵語資料における上昇変音の用例

字音	早期粵語	現代語			
	Williams(1842)	饒等	中嶋	千島	Kataoka
話 <sup>6</sup> (名詞)	英話 <sup>6</sup> , 俗話 <sup>6</sup> /*, 官話 <sup>6</sup> /*, 白話*, 一句話*, 土話*	話*, 廣州話*	俗話*, 白話*, 話*	俗話*, 白話*, 土話*	廣東話*
文 <sup>4</sup>	白文 <sup>4</sup>	英文*	英文 <sup>4</sup> , 中文 <sup>4</sup>	英文*, 中文 <sup>4</sup> /*	英文*, 日文*, 中文 <sup>4</sup> /*
名 <sup>4</sup> (名詞)	名 <sup>4</sup> , 人名 <sup>4</sup> , 地名 <sup>4</sup> , 佢名 <sup>4</sup>	名*	名*, 地名*	名 <sup>4</sup> /* <sup>1)</sup> , 地名*	名*, 地名*
下 <sup>6</sup>	鄉下 <sup>6</sup>	—	鄉下*	鄉下*	鄉下*
銀 <sup>4</sup> (お金)	工銀 <sup>4</sup> , 銀 <sup>4</sup>	白銀*, 錢銀*	銀*(銀), 銀 <sup>4</sup> 仔	銀*仔	銀 <sup>4</sup> (銀)
錢 <sup>4</sup>	銀錢 <sup>4</sup>	銀錢*	銀錢*	銀錢*	錢*
枱 <sup>4</sup>	寫字枱 <sup>4</sup>	波檯*	枱*	枱*	枱*
頭 <sup>4</sup>	事頭 <sup>4</sup> , 舖頭 <sup>4</sup>	事頭*, 舖頭*	事頭*, 舖頭*	事頭*, 舖頭*	舖頭*
轎 <sup>4</sup>	抬轎*佬	抬轎*	轎*車	轎*佬	—
房 <sup>4</sup> (部屋)	房 <sup>4</sup>	房*	房*	房*	房*
路 <sup>6</sup>	來路 <sup>6</sup> (舶来の)	來路*	來路*	來路*	—
位 <sup>6</sup> (量詞)	位 <sup>6</sup>	各位*	位*	位*	位*
袋 <sup>6</sup>	枕袋 <sup>6</sup>	袋* <sup>ii)</sup>	枕頭袋*	枕頭袋*	袋*
魚 <sup>4</sup>	石斑魚 <sup>4</sup>	金魚*	金魚*	石斑魚*	金魚*
年 <sup>4</sup>	今年 <sup>4</sup>	今年*	今年*	今年 <sup>4</sup> /*	今年*

<sup>i)</sup>動詞として用いられるときは多く meng<sup>2</sup> と発音される。

<sup>ii)</sup>大きな布のバッグの時は元の声調で、上昇変音になると、ポケット、小さいバッグ、その他の材料で作られたバッグを指す。(p.46)

表 1 の中でウィリアムスが上昇変音としているのは、“話” (ただし、陽去という表記の場合もあり、表記にはゆれがある) と“轎” だけである。もちろん資料と実際の言語とが全く同じであるとは限らないが、ウィリアムスの著作には声調の調値に関する詳細な記述や説明がなく、上昇変音という現象についても全く言及していない。この時代、変音はまだそれほど顕著な現象ではなかったのだろうか。それでも“話” と“轎” の例を見るとその萌芽はすでに見られたのである。今回はこの後の時代の資料を年代別に見ることにより、変音の形成過程について考察を深めたい。